高知の医療・福祉を考えるシリーズ（その11）

男と女の違いを考える

男らしさ、女らしさとは何か その違いはどこから生まれるのか

医学博士・
山本浩志院長

男女共同参画社会作りの一貫として、積極的に推進してきた「ジェンダーフリー」。高知県、高知市は、この用語使用の見合わせを決めている。「ジェンダーフリー」とは文化的、社会的に作られた男女の性差（ジェンダー）を解消することを示すが、「作られた性差をなくしてほしい」、あるいは「男女の違いを尊重すべき」と賛否は大きく分かれている（平成15年9月1日高知新聞より）。

今回は、ジェンダーフリーを含め、男女の違いについて南国中央病院の山本浩志先生に考え方をお聞きしました。

語り手／山本　浩志さん（南国中央病院　院長）
聞き手／長谷川恵子さん（高知放送アナウンサー）

男と女、オスとメスには本質的な違いがある

――先生はジェンダーフリーという考え方をどう思われますか。

最近「ジェンダー」という言葉が使われるようになりました。これは社会的性差という意味で、男女の差は本能や生理的なものによるのではなく、教育や文化の違いによって生まれるというものです。ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではなく、女になるのだ」という言葉もそうです。

しかし男と女は本質的（生物学的）に差があり、それが男女の気質や行動の違いになって現れていると思います。これは洋の東西を問わず、また宗教や文化に関係なく存在しているものです。したがって、男女の性差を否定する、あるいは解消するジェンダーフリーという考え方には私は反対の立場です。

ここではまず男女の違い（特性）を検証し、その上で男らしさ、女らしさの意味を考えてみたいと思います。ただ人間といえども動物（サル）の一種であり、ほかの哺乳動物や鳥類と変わらない点も多々あるので、男と女という表現だけでなく、動物の場合はオスとメスという表現を使いたいと思います。

――では動物として、オスとメスの違いはどのようなものでしょうか。

人間を含め、一般的な動物の違いを述べてみますと、

①オスはメスよりも体が大きく、力が強い。

②オスは戦う（争う）。

③オスはメスよりも美しく、派手である（例えばライオンのたてがみ、シカの角、クジャクの羽根など、すべてオスの特徴です。ただ人間の場合は分かりません）。

④メスが主に子供の世話をする。母性本能という言葉もあるように、メスの方が子供に対する愛が深い―などです。

もちろんいくつかの例外はありますが、これらの四点の中に、人間を含めオスとメスの基本的な違いが集約されています。

「美しい」と表現される母性本能の正体は？

――母性本能といえば、人間でも動物でも、母親の子供への愛は献身的で美しいものと考える方もいますが、どうでしょうか。

美しいという表現は適切でないと私は思います。それは次のような理由からです。

まず、一人の子供をつくるには、オスの精子とメスの卵子が必要ですが、オスは毎日でも精子をつくることができます。一方、メスが卵子をつくるには一定の期間が必要です（人間の場合は約一カ月）。しかも人間をはじめ、哺乳動物では、メスは胎内に子供を宿し、お産という危険を冒し、さらに母乳で育てるという一連の作業が必要です。

これをコスト面から考えてみますと、一人の子供をつくるコストは、メスの方がオスよりもはるかに大きく、もし子供に死なれた場合、その痛手ははるかにメスが大きいことになります。

このコスト面の大きさが実は母性本能の正体でもいえます。つまり生物学者のトリヴァースの唱える投資の理論です。「お腹を痛めた子」という表現もそれに通じるものです。

よく「愛は美しい」と言われますが、母親の子供への愛にしても、若者の恋人への愛にしても、自分の子供だけがかわいい、恋人がすべてであるという利己的な面も多く、科学的には、「愛は美しい」というより、本能的で利己的なだけに「愛は強い」と言うべきだと思います。

――ところで女性は母性本能をもつことによって、根本的に男性とどう違ってくると考えますか。

母性本能は子供がかわいいと同時に、子供を守るという本能です。女性は守るものがあるだけに保守的であり、受動的になりやすいものです。戦いも避けることになるでしょう。

しかもこの性質は母親になってからというより、ずっと以前の三歳頃より芽生えるとされています。つまり「男はこうあるべき、女はこうあるべき」という役割を学ぶ前から存在するのです。

その意味ではボーヴォワールの先の言葉は正しくないと思います。

――三～四歳児においても男女の違いはあるのでしょうか。

これはあると思います。幼児行動の研究者であるエリノア・マクビーによると、一般に男児が縄張りとか他者を支配する事に興味を持つのに対し、女児は社会の中で他者との関係をこじらせずに上手くやっていくことに興味を持つ傾向があるとされます。遊び一つをとっても、男児が興味を示すのは、はっきりしたルールがあり、戦いや競争があり、勝ち負けのある遊び、いわば「ゲーム」であるのに対し、女児は勝ち負けのない、協調的な遊び、いわば「遊戯」であることも多いものです。

もちろんこの傾向は相対的なものですが、一般に「女児が男児より育てやすい」と言われるのも、この協調的な気質による事が大きいと思われます。協調的というのは、自分を相手や環境に合わすというだけでなく、相手の気持ち（心）を読み取る能力の発達とも関連しています。それだけ女児は優しく精神的な成長が早いものです。

男の本能の中にある戦いのプログラム

――男性（オス）は小さい頃から戦いとか争いを好むという事でしょうか。

男性は女性と違って戦う事が運命づけられていると思います。しかも動物では多くの場合、メスをめぐっての戦いで、その方法は大きく二つに分かれます。

①ゴリラやオットセイのように、戦いに勝ったオスが何頭ものメスを独占する。

②クジャクのように美しい羽根を持つことでメスの関心をひく（オスクジャクの羽根はメスの選り好みによって進化したとされます）。

そのほかにも、鳥類や昆虫の中には、オスが一番大きな餌のプレゼントをすることで、メスの愛を得るものもいます。

いずれにしてもオスはメスをめぐって戦う（挑戦し努力する）ことで、ゴリラのように体が大きくなるものから、クジャクのように美しくなるものまで、さまざまな個性を持つことになります。この点多くのメスは地味といえます。

――なぜオスは戦うのでしょうか。

これは簡単に説明できると思います。

例えば、いま仮に十匹のオスと十匹のメスがいたとします。そこで交配がおこり、五匹のメスが妊娠したとします。妊娠したメスは交配を拒否することも多いので、子孫を残したいオスは、今度は妊娠していない残りのメスをめぐって戦う（争う）ことになります。どの動物もオスとメスの比はほぼ一対一ですので、常にオスは余り、少ないメスをめぐって争うことになります。

もちろん人間の場合は、それほど単純ではなく、戦いのほこ先が仕事や権力に向けられることも多いですが、戦いというのは、オス（男）の持って生まれた生物学的特性であることは間違いありません。男の遺伝子や男性ホルモンの中には、戦いのプログラムが組み込まれているものです。

ちなみに男性ホルモンは胎児の生殖器を男性化するだけでなく、脳にも作用し妊娠十六～二十八週で心理的にも男性としての心の発達を促すとされています。その意味では男女の性差は胎児期に決まり、生まれる時は男児は男として、女児は女として生まれるようにプログラムされています。

また人間以外の哺乳動物、例えばメスのサルに男性ホルモン（テストステロン）を注射すると攻撃性が増し、集団での地位も上がると報告されています（反対に子育ての行動は減ります）。

したがって戦いの要素の強い職業、例えば軍隊とか企業はやはり男性社会が続くことになるかもしれません。

この際、戦いというものは単に他人を攻撃し、傷つけるということだけでなく、支配的な性質、集中力や独断性、達成に対する情熱、リスクや嫌な仕事をも厭わない能力等とも関連しています。それは人間として長所でも短所でもありますが、その気質は企業での地位や出世競争には好都合という事です。

――「ガラスの天井」という例え、すなわち女性は組織の目に見えない力によって出世が妨げられると言われていますが、この点はどう考えられますか。

確かに組織や社会に女性の成功を妨げる要因もあるかもしれません。しかしこの点「女より男の給料が高いのは」の著者、キングスレー・ブラウンは「男の方が女性に比べ元来競争的で、リスクを厭わず、嫌な仕事にもつき、出世の努力を惜しまないとしたら、出世する男が多く、給料が高いのも当然のことかもしれない」と述べています。つまり仕事に関しては男女に根本的な能力の差があるというより、仕事に対する意欲や情熱が男性の方がはるかに強く、出世は男の自尊心や生物的欲求に合っていると考えられます。

この点、女性は出世以外にも子育てをはじめ興味や満足の範囲が広いということです。つまり何をもって満足とするか、あるいは成功とするかの目指す方向が男女では違うということです。

――人間の場合はどうだと考えられますか。

本質的には他の動物とそれほど変わらないものです。人間の場合でも選ぶのは女性の特性といえます。

「三高」という言葉がありますが、女性は身長、学歴、収入など自分より高い男性を選ぶ傾向があると思います。これは結婚や妊娠が女性にとってコスト（リスク）が大きいこともありますが、女性は本質的に選ぶ性だからです。

もちろん男性も女性を選ぶ（正しくは求めることとはしますが、むしろ男は面子とか見栄のために、学歴や収入は自分より低い人を選ぶことも多いものです。これは本当の意味で選んでいるとは言えません。

そして、人間を含め動物においてオスがメスを求め戦い、メスが選ぶという動物の習性のため、またメスは自分より高い（優位な）ものも選ぶために、実はメスはオスよりも一般的な意味で優位に立てない原因があります。

優位というのは優れているということではありません。むしろオスとメスの戦略をみると、はるかにメスが高等戦術で、オスはおだてられ踊らされ、自分の命を縮めている気がします。

事実、平均寿命をみると日本でも、男女平等の先進国であるフィンランドでも男は女に比べ七歳短くなっています。これは男性ホルモンの競争的な気質が、人間においても男の平均寿命を短くしている一因ではないかと思います。さらに男性はストレスにも弱く、早急な結論を選ぶ傾向にあり、自殺する者の割合も女性の二・六倍に達していますが、これも同様に男の競争的な気質に起因しているものと思われます。

面子や見栄が男をつくり、女性を守る原動力になる

――最近では男性も面子（めんつ）や見栄を捨てて、自然に振る舞い、無理しない生き方が推奨されていますが、それはどう思われますか。

生き方に関しては人それぞれですが、私はどちらかといえば反対です。というのも、男は面子や見栄によって男になる部分があるし、それに逆境や我慢の中で鍛えられる精神もあるからです。「武士は食わねど高楊枝」のやせ我慢も必要です。

多分、多くの男にとって自然に振る舞い、無理しない生き方というものが、かえってオスとしての動物本能に反し、むしろ不自然な生き方であると思います。それは決して男にとって楽なことではありません。

無理しない生き方とは、別の言葉で言えば現実に満足し、夢や目標や理想を持たないことに通じる一面もあります。といいますのも夢や目標を持ち、それを実践するためには現実と闘わなければなりませんし、そのための挑戦や努力が要求されるからです。また、その挑戦や努力の中には男の面子や見栄も入っているものです。

一般に男性が女性に比べ、夢やロマンを追う傾向が強く、少年の心を持ち続けられるのもそのためだと思います。ただその際、夢やロマンの対象は、現実の家庭の中よりも、家庭外の世界に向かうことが多いものです。それが「男のロマン、女の不満」と言われる所以だと思います。

先のキングスレー・ブラウンも次のように言っています。「父親に家事をせよとフェミニストは言うが、そうしたところで結局、多くの男は満足を得ることはできないだろう。男にとって『家庭外での成功』――それは男の自尊心の第一の拠り所である」――と。これはたぶん大昔の狩猟時代より、男は外で獲物を捕ることが自尊心の拠り所であった名残かもしれません。（とはいえ、現実の社会において、共働き夫婦では、夫が家事や育児を分担することは当然だと思っています。）

ところで私の方から尋ねたいのですが、なぜ先のロシアやペルーの人質事件では女性の方が先に解放されたのでしょうか。古くは北海でのタイタニック号の遭難のように、女性がボートで脱出し、男性は船とともに沈んでいったのでしょうか。ジェンダーフリーならくじ引きかジャンケンで決めるべきです。

――先生がおっしゃるように、子供や女性が先に解放されるケースが多いようですが、それにはどうお考えですか。

これは、弱い女性を助けるという武士道精神や、男としての面子があるかもしれません。しかしそこには、男女の本質的な違いがあると思います。男も女も「個」としての生命は平等としても、人類という「種」を考えた場合は違ってきます。女性は個であるとともに、種を伝える役目があり、また、中には子供を宿した人もおり、この点女性の生命は男性よりも価値が高いといえます。それが女性が先に解放される理由だと思います。

また女性が解放される場合どういう男性を選ぶ（好きになる）かは、ジェンダーフリーだからジャンケンを提唱する男だと思います。自らの生命を犠牲にする男だと思います。それは男にとっては最高のやせ我慢ですが、そのやせ我慢が男として女性と子供を守る原動力として働くものと思っています。

そしてもし、日常でも まさかの時、生命を犠牲にする可能性がある男の方を女性が好きになり、結婚相手として選ぶことが多いなら、男としてのそういう気質を小さい頃より躾しつけ、教育することは親として当然のことがもしれません。多分、男らしさ、女らしさと言われる気質や行動の中には、無意識のうちにも男として、女としての戦略が深いところに秘められていると私は思っています。

ジェンダーフリー社会は男女の本能を弱めてしまう

――最近は女性が職場に進出し、さらには結婚しない、子供をつくらないという女性が増えているといわれていますが、これについて先生はどう思われますか。

職場（仕事）というのは根底に戦いの要素があり、家庭や育児とは相反する部分も多いものです。したがって仕事も育児も立派にこなすのは至難の業です。どちらかがおろそかになるのはやむをえないものです。

反対に仕事よりも家庭や子供が大事という男性は、守るものがあるということで、考え方や生き方が女性的になるかもしれません。

したがって現在言われているジェンダーフリー社会は、男性がオスとしての本能を弱め、女性がメスとしての本能を弱め、そういう中での男女共生、あるいは男女友だち社会だと思います。

ただ、それは時代の流れかもしれません。というのも、人間が動物としての野生を捨てることで人間社会を築いたように、人間が男と女の垣根を低くすることで新しい時代を築くということは大いにありうることです。そのための教育が必要だということも頷（うなづ）けます。教育とは「裸のサル」の著者、デズモンド・モリスが言うように、人間の本能や遺伝的支配に対する戦いなのですから。しかし、それが望ましい社会かとなると、私は疑問です。

――ジェンダーフリーをすすめていくとどういう時代になっていくとお考えですか。

極端かもしれませんが、もしかすると人工胎盤による生命の誕生やクローン人間の時代になっていくかもしれません。人工胎盤は女性にとって安全でしかも楽ですから。それに伴い仕事を休む必要もありません。百年後か二百年後にはそうなっている可能性はあります。といいますのも、科学技術というものは、それを必要とする人がいる限り、常にそれに答え、実用化されてきたからです。

例えば輸血一つをとっても（これはある意味で最初の臓器移植です）、百十年前は悪魔の行為として非難されていましたが、今は輸血（献血）は推奨されており、ともわれています。道徳とか倫理は、初めは非難の形で表れてもやがては技術の擁護にまわる、それが科学の歴史であり、人間の歩んできた道です。

――「裸のサル」「女より男の給料が高いのは」「男の脳は欠陥脳だった」「利己的な遺伝子」「ジェンダーフリー教材の試み」「女という快楽」「オスの戦略、メスの戦略」など。特にジェンダーフリーを考える人は「女より男の給料が高いのは」を読んでいただきたいと思います。

男女平等社会の方向性を決めるのは女性自身

――では最後に、先生自身の考えられる男女平等社会についておうかがいします。

その点については、具体的な将来像を持っているわけではありません。ただどのような男女平等（共生）社会を築くにしろ、まず男女の特性やその生物学的な違いを知る必要があるというのが、今回の主張です。それは男女はこうあるべき、こうあってほしいということよりも先に議論すべきことです。

たぶん男女の違いの多くは教育や文化によって生まれるのではなく、人間の進化の過程の中で何十万年にわたって形づくられたものです。それだけにその違いは尊重すべきと考えますし、やがてそのことが問われる時代もくると思います。

少し観点は違いますが、私は「男の脳は欠陥脳だった」の著者・大脳清氏の次のような女性への期待に共感するものです。

「現代は科学や文明が発達し、物質的には豊かになったが、厳しい競争の中で心安らぐことのない社会になっている。この多くは男の脳（男社会）がもたらしたものだが、そこに人間の幸せの限界があるように思われる。ただ女性も男の脳に負け まいと積極的に社会に進出することで、もしかしたら本来の姿を歪めているかもしれない。女性（女の脳）だからこそ見つめ、実現できる世界があるのではないか」――と。

スペースの関係で多くは語れませんが、ジェンダーフリーに反対するのは、それを推し進めていくと、やがて男女は限りなく近づいていき、均一な社会をつくると思うからです。平等であるが、単調で変化に乏しい社会です。

その世界では、男女は助け合っているというより、お互いが似た考えや似た権利意識を持ち、また同じ夢や同じ目標に向かって協調するというより、戦っていると思うからです。

男女がお互いにひかれるのは、そこに違いがあるからです。自分と同じような相手なら、ひかれることはずっと少なくなると思います。それは動物でも個々の生殖細胞レベルでも同じです。つまり非対称だからひかれるのです。そもそも生命は非対称で、人間の体を構成しているタンパク質は、L（左）アミノ酸の一方だけから成り立っています。死ぬと左右のアミノ酸が同数の対称となります。また資本主義でも分業で、人々が違う仕事（役割）をするから進歩するのです。

果たして女性という性は、それは個々性でしょうか。子供を産み育てることを女性の特権と考えるのか、重荷と考えるのかによってその答えは違ってくると思います。女性が人間としてという以上に、女性としての性を楽しめる、その方がはるかに豊かな社会だと思います。

豊かさは多様性の中にあり、多様性は選択の中にあり ます。そして女性は まさに選択、すなわち選ぶ側の性なのです。どのような男を選ぶのか、仕事か専業主婦か、子供を産むか産まないか、育児で子供を どのような子供に育てるか等、その多くは女性の手の中にあります。

結局どのような男女平等（共生）社会になるにしろ、その方向性を決めるのは女性自身だと私は思っています。

――どうもありがとうございました。

長谷川恵子さん

意見広告

この紙面へのご意見は「CMS里の会」まで
（南国市岡豊町中島一五三五
・電話088・866・6666）

CMS里の会 ☎088・866・6666
介護老人福祉施設 陽だまりの里 ☎088・866・0888
養護老人ホーム 双名園 ☎088・952・2439
ケアハウス つくしんぼ・たんぽぽ・菜の花 ☎088・866・0880 ☎088・866・8889 ☎0887・56・5066
介護老人保健施設 夢の里 あいの里 ☎088・866・6666 ☎0887・54・5555
医療法人地塩会 南国中央病院 ☎088・864・0001